

新約聖書 ヨハネによる福音書 8 章 31 節—36 節（新共同訳）

³¹ イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。³² あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」³³ すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」³⁴ イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。³⁵ 奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。³⁶ だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「真理は自由にする」

本日は宗教改革主日です。1517 年 10 月 31 日にマルティン・ルターがヴィッテンベルグ城教会（しろきょうかい）の門扉に『95 箇条の論題（95 箇条の提題）』を貼り出し、キリスト教会で伝統的に行われていた事柄の是非を問いました。

当時、キリスト教会では、それを買えば罪の赦しのためのあがないが免除されるという免罪符（正確には贖宥状〔しょくゆうじょう〕）の販売が公然と行われていました。それを疑問視したルターは、『95 箇条の論題（95 箇条の提題）』を通して、罪の赦しのためのあがないが免除される贖宥状の販売は、神の真理から外れたものであると説きました。

キリストは無償の愛によって、人間の救いのために十字架に掛かり救いを成し遂げました。ところが教会は、贖宥状の販売によって、「お金によって救いを買い取れる」という誤った信仰へ人々を導いている、とルターは指摘したのです。

もともとの『95 箇条の論題』は、大学内の学術的な討論のために作成された文書でした。しかしその内容が、救いとは何か、愛する人や自分が死んだらどうなるのかという人々の根本的な関心事と深く関わっていたため、ルターによる 95 箇条の論題の提示をきっかけに、教会の在り方を問う声がドイツの各地に広まりました。

しかし、それに伴う混乱もありました。これは人間社会においてしばしば起きることですが、改革の進め方をめぐる意見の違いが、深刻な内部対立を生み出したのです。

そして、改革がなかなか進まないことに苛立ちを募らせていた人たちが、実力行使に訴え始めました。彼らは、修道院の強制的な解体や、教会に安置されている聖像を破壊する運動に取り掛かります。

修道院の強制的な解体とは、この宗教改革の流れの中、いつまでも伝統にしがみつき修道院に残っているのはけしからんと、修道院を襲撃して修道士や修道女を力づくで引きずり出し、修道服を剥ぎ取ってしまうという過激な行動です。

聖像破壊の運動とは、信ずるものはただキリストのみであるという思想のもと、教会のマリア像や聖人たちの像などを一切取り払ってしまうべきだという主張のもとに行われた運動です。

それらのことと共に彼らはまた、礼拝、すなわちミサの在り方を急激に変えようとし、信徒は、ミサにおいてパンだけを受け取り、ブドウ酒は受け取っていませんでした。ところが急進的に改革を進める人々は、パンとブドウ酒の両方をミサで信徒に受けさせようとし、これらのあまりに急激な改革によって混乱が生じ、市中は騒乱状態となっていました。

その混乱をおさめるために、ルターがまず行ったことは、町の教会での、連日八日間にもわたる民衆への説教でした。ルターはそこで、一人ひとりが神の前に立ち自らの信仰を確立すること、その信仰から出る愛によって生活する必要性を説きました。

ルターは「力によらずことばによって」を改革の理念とし、「神のことばは前進する」と説きました。また、力を行行使しての性急な改革ではなく、聖書のことばに信頼した着実な改革を進めるように訴えました。

そんなルターの八日間の説教が終わる頃には民衆たちの動揺もおさまり、騒乱は終息に向かっていきます。ここから、時間をかけた着実な改革が始まりました。

聖書を何よりも重視したルターの宗教改革のスローガンの一つは「聖書に帰れ」でした。これは、伝統や慣習ではなく、聖書の言葉のみを信仰の根本とすべきだという考え方です。

ルターは、聖書を「祈り」をもって読むように勧めました。自分に「示してください」「教えてください」と祈りの心をもって読むことで、聖書の真理が心に入ってくるといいます。

さらにルターは聖書を声に出して読み、ときには歌うことも勧めています。声に出すこと、歌うこと。五感のすべてによって繰り返し聖書と交流することで、聖書の言葉は深く入ってくると説いています。

またルターは、聖書はこの世から離れた、浮世離れした状況で読むのではなく、試練の多い実生活のただ中で読むように勧めました。その時、聖書の言葉は生きて心に働きかけてくるということです。

試練のただ中で聖書を読めと説いたルター自身の道のりも、試練と困難に満ちたものでした。ルターは激しいうつ状態にも苦しみました。

ルターは、聖書の中で詩編をたいへん愛し、繰り返し詩編についての講義（講解）を行いました。1545年11月17日、62歳の時、創世記講義の終了をもって、ルターはその生涯にわたって続けてきた講義を終えました。創世記の終わり、ヨセフの死について語った後で、彼は約10年間続いた講義をこう締めくくりました。

「さて、これが愛する創世記であります。どうか神が私の後に来る他の人にもっとよい講解をさせてくださるよう。私にはこれ以上のことはできません。私は弱っています。神が私によい、祝福された最期の時をもたせてくださるよう、どうか私のために神に祈ってください」。

時には猛烈に闘いながら先駆者の道を歩んできたマルティン・ルターのこの最後の言葉からは、突き抜けた穏やかさが伝わってきます。

ルターは、その生涯において、神を求め、神の真理を求め、聖書を読み続けた人でありました。

本日の福音書には、イエスが神の真理について語った言葉が記されています。イエスは、こう言います。「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」（ヨハネ 8:32）。

真理の言葉は、私たちが神の前に立たせ、偽りの価値観から解放します。偽りの価値観には、「お金があれば幸せ」「世間の目を気にする」「立派な会社に勤めることが大事」などの、ありとあらゆるものがあり、それらは、私たち人間の心を縛り不自由にするものです。

神の真理を知ることによって、私たちは本当の自分を知り、本当の自由を得ることができるのです。

そこには人間社会の中に紛れた集団に属する自分ではなく、神の前にただひとりで立つ人間の自由と良心が、真理によって証しされるのです。

真理を知るとは、真理によりたのむことであり、さらに真理に生きることにつながります。ブルトマンという聖書学者（1884 年—1976 年）はこう述べています。「真理を知るとは、それによって生きることを知ることと同じである」。

さて、早いもので今年もあと 2 ヶ月ほどとなりました。

「神を求める」とは、神と手をつなぐこと、神と相互に手をつなぐことなのでしょう。

「神を求める」とことと、「神の真理を求める」ことには、少し違ったニュアンスがあるように思えます。

「神を求める」ことから、ジタバタともがき苦しみながら、必死で神の手を握ろうとする人間の姿が思い浮かびます。

他方、「神の真理を求める」とは、神は初めから手をつないでくれているのを知ることではないでしょうか。

イエスは、「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である」と言います（ヨハネ 8:31）。

一見すると、「言葉」は人間社会で必要なこの世的なものだというイメージがあるかもしれません。

しかし、神の言葉は生と死の境界線を越えて、真理と光のもとに働き続けるのです。

人生において、私たちは、悩んだり苦しんだり、自分なんてダメだと落ち込んでしまったり、死への不安や恐れを感じることもあるかもしれません。

ですが、そのような時こそ、神を求め、神の真理を求めて、私たちの上に神のゆるしと愛がいつもあることを覚えながら、主イエス・キリストと共に希望をもって歩んでいきましょう。

お祈りをいたします。

天の神様。あなたは、私たちをとらわれから解放し、自由に生きる道を与えてくださいました。私たちがこの自由を知り、隣人と共に愛をもって生きていくことができるようにしてください。御子 イエス・キリストによって祈ります。
アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 エレミヤ書 31 章 31 節—34 節（新共同訳）

³¹ 見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。³² この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。³³ しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。³⁴ そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

新約聖書 ローマの信徒への手紙 3 章 19 節—28 節（新共同訳）

¹⁹ さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法の下にいる人々に向けられています。それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服するようになるためなのです。²⁰ なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。

²¹ ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。²² すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。²³ 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、²⁴ ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。²⁵ 神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。²⁶ このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。

²⁷ では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。²⁸ なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。

教会讃美歌 239 番「ひととなりたる」337 番「やすかれ」、253 番「カルバリの十字架に」、200 番「まことの神よ」。